

ペレストロイカ以降のカムチャツカの先住民社会

渡 部 裕

はじめに

発表者は 1997 年からカムチャツカの先住民文化に関して、1) 先住民の伝統的な経済活動、すなわち狩猟、漁撈、採集、トナカイ遊牧などの生業ならびに関連する儀礼などの精神文化について、2) 文化接触、とくに日露講和条約発効から太平洋戦争期間の北洋漁業に伴う日本人漁業者と先住民との接触について、3) 先住民社会に対する政治・経済体制の影響について、4) 現代の先住民文化について、これらを主要なテーマとして現地調査を行ってきた。本発表では、ペレストロイカ以降のカムチャツカの先住民社会のおかれてきた状況について、現地における聞き取りをもとに、政治的経済的視点から現状と今後の動向を検討する。とくに、一連の政治的枠組みの変革によって先住民の政治的マイノリティー化が進む状況を指摘したい。

ソ連体制下における先住民の動向

カムチャツカの主要な先住民集団は、南部に居住してきた狩猟採集民イテリメンおよび北部のコリヤーク（沿岸域で狩猟採集を行う海岸コリヤークと内陸でトナカイ遊牧を行うトナカイコリヤークに大別される）である。また、半島中央部には約 150 年前に大陸からトナカイ群とともに移動してきたエベンが居住してきた。

これら先住民は 18 世紀前半には帝政ロシアの支配下に置かれ、毛皮交易などをつうじて商品経済との関係を深めていった。さらに、ロシア革命後、1930 年代に入るとトナカイ遊牧や畑作等を基盤とする集団農場、国営農場が建設され先住民に対する集団化が導入された。多くの先住民は伝統的な集落から新たな地への移住を余儀なくされるなど、大きな精神的衝撃や文化的変革を体験した。その後、1960 年代になると集団農場の統合による国営農場化が実施され、それにとまう再移住・集落の再編が行われた。

さらに、1980 年代後半からのペレストロイカは、再び先住民に社会的にも経済的にも大きな混乱をもたらした。この一連の混乱期は、あたかも政府が住民を見捨てたかのような状況となり、職を失った先住民の多くはサケ漁や家庭菜園によって自前で食料確保しなければならなくなった。それまで国営農場が行政サービスの実質的なよりどころであったから、その消滅や解体によって地域住民の精神的打撃は大きかった。

経済的状況

ペレストロイカ以前、地域の主要産業であった国営農場・国営企業は資本主義体制への移行とともに解体あるいは縮小された。その最大の要因は国内外における需要の有無や製品の輸送コストの問題に起因している。典型的なものとしてトナカイ遊牧組織をあげることができる。ソ連時代をつうじてトナカイ遊牧産業はカムチャツカを含むシベリアから極東地域の集団農場あるいは国営農場の主要な生産部門であった。しかし、その理由はあきからではないが、生産されたトナカイ肉は都市部へ出荷されることなく、ひたすら地域住民の消費に供されていた。トナカイ肉の新たな消費地は開拓されなかったわけである。この間、トナカイ遊牧産業は国営企業として手厚く保護され、補助金によってトナカイ肉の販売価格は低く抑えられ、地域住民は安価なトナカイ肉を手に入れることができた。これが、トナカイ遊牧産業が市場経済下で衰退した理由である。

さらに、カムチャツカの地方経済の振興にとって交通網の未整備という大きな課題が残されている。自然環境、地形の特徴から道路工事に多額の費用を必要とすること、人口が希薄で利用者が少ないことなどがソ連時代を通じて道路網の整備が行われなかった理由であろう。

政治的状況

ソ連体制崩壊はロシアに民主主義をもたらした。しかし、プーチン政権は知事の直接選挙制を廃して事実上大統領による任命制や連邦管区に大統領全権代表を配するなど、一連の中央集権的政治制度改革を行った。また、選挙制度改革やカムチャツカ州とコリヤーク自治管区（以降、「自治管区」とする）との合併はカムチャツカの先住民の政治的マイノリティー化をさらに進める結果となってきている。かつて、連邦議会国会院（下院）議員選挙はカムチャツカ州、自治管区それぞれが1名枠の小選挙区が設定されていたが、2007年12月の選挙から小選挙区を廃して完全比例代表制となり、先住民を含む地域住民の意見が国政に直接反映し難いものとなった。

さらに、2007年7月のカムチャツカ州と自治管区の合併は先住民になにをもたらしたであろう。この合併は連邦政府の指導によって住民投票を経て実施されたが、連邦政府は旧自治管区の住民に航空運賃を含む物価の値下げなど、住民生活が向上することを合併の効果として説明していた。合併の効果は現在のところ現れていない。合併によって自治管区の先住民の政治的発言力は低下したと判断される。それは自治管区の人口29,000人に対して先住民人口はその35%を占めていた。合併後の先住民人口はカムチャツカ全体の人口の2.6%にしか過ぎないからである。

(わたなべ・ゆたか／北海道立北方民族博物館)

ウイルタの映像について

笹倉 いる美

1. ウイルタの画像的記録についての概要

ウイルタ（旧称オロッコ等）はサハリン島に暮らす少数民族である。サハリン島の北緯50度以南が日本領の時代があり、戦後は日本に移住した人たちもいる。日本領におけるウイルタの人口はおおよそ300名で推移しており、ほとんどが敷香支庁、なかでも敷香郊外のオタスとよばれた場所に多くが暮らしていた。

戦前のウイルタに関する画像的記録を、記録者で区分すると、ウイルタ自身が行ったものと、それ以外にわけられる。

ウイルタ自身が記録したものとしては、児童が描いた絵画が残されている。

日本人やロシア人が行った画像的記録には、絵画、写真、動画等がある。

古画とよばれる絵画には1800年代のものもあり、これらについては池上二良北大名誉教授がまとめておられる。（池上二良 1979『昭和52年度ウイルタ民俗文化財緊急調査報告書(1)：ウイルタ古画集録』 北海道教育委員会：札幌）

写真はB.ピウツスキらが1900年代初めから撮影している。1905年にサハリン島の北緯50度以南が日本領になり、日本人研究者がサハリン島を訪問する機会が増えるにしたがって、日本の出版物へのウイルタ（文化）を撮影した写真の掲載も増えてゆく。

ウイлтаの写真でよく流布しているものは、職業写真家・半澤中が敷香周辺で撮影したもので、絵はがきや本の挿画としてもよく使われた。現在でも引用されることが多いが、半澤がウイлтаやオタスの杜を撮影した期間は限られていることを考慮する必要がある。

絵画には、画家・木村捷司の一連のものがある。また、鷹部屋福平の『北方圏の家』(1943 彰国社)には昭和 15 (1940) 年にオタスを調査した様子が記録されている。半澤の写真と木村の絵画、鷹部屋の記録を比較すると、オタスの変化を確認することもできる。

2.民俗学者宮本馨太郎の映像(動画)について

民俗学者の宮本馨太郎は、昭和 13 (1938) 年に、第 2 回北方文化調査団の一員として、樺太の敷香と多蘭を訪れ、16mm フィルムに記録を残した。この記録は『オロッコ・ギリヤークの生活』というタイトルの下編集されている。内容については、撮影から 20 年後に『民族学研究』に発表された。(宮本馨太郎 1958 「オロッコ・ギリヤークの衣食住」『民族学研究』22:5-14)

3.北海道立北方民族博物館の映像(動画)について

ウイлтаの北川アイ子氏は樺太の野頃生まれ、少女時代はオタスの杜で過ごし、昭和 43 (1968) 年に網走に移住する。北方民族博物館では平成 9 (1997) 年 6 月から一年にわたり、北川さんの生活の記録映像を約 20 時間分撮影し、これから 45 分間の「北川アイ子さんの生活の記録」を編集した。

北川さんは 2007 年にお亡くなりになっており、これだけ長い記録映像は他にはないという唯一性から価値を計ることもできるが、映像を記録することを通じての、様々な交流もえがたいものであった。記録をきっかけにして行った事柄も多く、博物館の財産となっている。この記録映像は、地元の刺繍サークルの勉強会などに使われるなど活用されている。現在サハリンに暮らすウイлтаの方々が、自分たちの親、祖父母、親族のことを非常に知りたく思っているため、今後はこの記録映像の提供も当然考えてゆきたい。

映像(動画)の記録は、他の媒体以上に機材や技術を要すものである。先述した宮本は、15 歳の頃から映像撮影をおこなっていたという。サハリン島を訪れた時には、すでに 12、3 年の映像撮影・編集のキャリアをもっていたことを知ると、現在ほど簡便な機器がない時代に記録映像を残したことについても納得できる。北方民族博物館では開館時から映像を収集し利用することを行っており、映像に対しあまり構えることがない。こうした、記録者の記録媒体への興味・態度が、記録自体に影響をあたえるだろう。

(ささくら・いるみ/北海道立北方民族博物館)

サハリン少数民族と国境

加藤 絢子

日本統治下のサハリン南部では、1925年の日ソ基本条約による国交回復以後、国境取締法(1939年)を経て、日ソ国境警備が強化されていった。今回、1930年代以降の樺太庁予算関係資料をもとに、従来具体的な内容が明らかでなかった、樺太庁によるウイлта、ニヴフなどの少数民族の諜報活動起用について報告する。【本号「研究ノート」として掲載】

(かとう・あやこ/九州大学大学院比較社会文化学府 博士後期課程)

タイガ型トナカイ牧畜の多様性について

中 田 篤

ユーラシア大陸北部で営まれてきたトナカイ牧畜は、大きくツンドラ型とタイガ（北方針葉樹林帯）型に二分されてきた。しかし、タイガ型と分類されているトナカイ牧畜であっても、携わる民族の文化や地域的特性、時代背景などによってその展開は多様である。本発表では、映像資料によってタイガ型トナカイ牧畜の事例をいくつか紹介するとともに、その多様性について再確認・再検討した。

北方のトナカイ牧畜文化

トナカイ牧畜の起源には諸説あるが、約 3000 年前にステップの牧畜の影響を受けて誕生したという説が有力視され、トナカイ飼育発祥の候補地としては、サヤン地方とバイカル地方、そしてスカンジナビア半島の3ヶ所が挙げられている（佐々木 1984）。

また、サヤン地方のトナカイ牧畜がケットやセリクープ、ハンティ、ネネツ、エネツなど西シベリアの諸民族に、バイカル地方のトナカイ牧畜がエベンキ、エベン、ウイルタなどのツングース諸族をはじめ、サハ、ユカギール、チュクチ、コリヤークなど東シベリアの諸民族に伝播したと考えられている。

広範囲の分布を反映し、トナカイ牧畜の形態は地域によって異なっており、さまざまな文化要素にもとづいてサミ型、サモディー型、サヤン型、ツングース型、チュクチ・コリヤーク型の5つに類型化される（佐々木 1984）。

タイガ型トナカイ牧畜の多様性

トナカイ牧畜は、こうした5つの類型とは別にツンドラ型とタイガ型に大別される。ツンドラ型のトナカイ牧畜は、おもにツンドラ地域で営まれている形態で、数百～数千頭に達する大規模な家畜群を管理すること、トナカイの肉や血を食料として、毛皮や腱を衣類などの材料として日常的に利用すること、また一部を除いて搾乳はほとんどおこなわないことなどが特徴として挙げられる。

一方、タイガ型のトナカイ牧畜は、おもにタイガ地域で営まれている形態で、数～数十頭の比較的小規模なトナカイ群を飼育すること、移動・輸送手段、搾乳対象としてトナカイを利用するため、肉や毛皮を目的にトナカイを屠殺することが少ないことが特徴となっている。

こうした二分法では、前述の5つの類型のうち、サミ型、サモディー型、チュクチ・コリヤーク型がツンドラ型トナカイ牧畜、サヤン型、ツングース型がタイガ型トナカイ牧畜に対応している。

つまり、タイガ型トナカイ牧畜には、サヤン型とツングース型の二つの形態があることになる。それぞれの特徴についてはすでに文献等でも示されているが、映像資料の視聴によってそうした特徴の再確認・再検討をおこなった。

タイガ型トナカイ牧畜に関する映像

ツングース型トナカイ牧畜の事例として、ロシアにおけるエベンキのトナカイ牧畜を対象とした。上映したのは、北海道立北方民族博物館所蔵の次の3作品である。

- ・「ソビエト・エベンキヤ」(Советская Евенкия) 1983年、クラスノヤルスクテレビ(ロシア)制作、撮影場所：ロシア/エベンキ自治管区
- ・「タイガの遊牧民1 数百の住居」(Taiga Nomads 1 Hundreds of Houses) 1991年、イリュミネ社(フィンランド)制作、撮影場所：ロシア/中央シベリア高地

・「エベンキ 91」(Evenki91) 1991 年、ロシア科学アカデミー民族学人類学研究所制作、撮影場所：ロシア／イルクーツク州北部

一方、サヤン型トナカイ牧畜の事例としては、発表者がモンゴルで撮影したツァータン（トバ）の映像を上映した。（2004 年撮影、撮影場所：モンゴル／フブスグル県）

サヤン型とツングース型の共通点と相違点

これらの映像から、まず、トナカイを搾乳の対象としている点、トナカイに騎乗している点で両者に共通性がみられること、ただし、騎乗用の鞍の形状や騎乗方法などはツングース型とサヤン型で異なっていること、ツングース型ではトナカイ橇も利用されることなどが再確認された。

一方、トナカイの行動を制御するために、ツングース型ではトナカイの首から下げた紐に棒を結びつけたり、投げ縄を利用したりするのに対して、サヤン型ではトナカイを 2 頭一組にする方法が採られることが示された。つまり、トナカイを制御する技術という点でも、ツングース型とサヤン型には違いがみられた。

さらに映像以外の調査資料から、同じツングース型トナカイ牧畜のなかでも、地域や時期、民族によってトナカイ牧畜の方法にはさまざまな変異がみられることが示された。

こうしたツングース型とサヤン型のトナカイ牧畜の違い、またツングース型のなかの多様性には、起源や民族文化などのほか、それぞれが営まれている国や地域の政策、その時代的变化が影響していると考えられる。

(なかだ・あつし／北海道立北方民族博物館)

「遊牧の終焉」：映像記録の写実性と意義

平田昌弘

遊牧民の定住化が旧大陸全域を通じて急速に進んでいる。特に、この半世紀間の定住化の進展が激しい。遊牧民が定住化すると、その生業は農耕・都市型の生活様式に飲み込まれ、何千年かけて蓄積した遊牧民の無形・有形の技術が急速に失われていく。このような遊牧民の無形・有形の文化遺産が消失してしまう前に、民族誌、映像（写真・動画）として記録しておく必要がある。それは、もしその技術群が消失してしまった際、その技術を保持していた遊牧民が求める時に立ち返ることができるためにも、そして、遊牧を通時的・共時的に分析する研究者にとっても極めて意義有ることである。

乳文化こそ旧大陸での牧畜論を論考する上で極めて重要は生業項目であり、搾乳・乳加工の発明により牧畜は成立・成熟していった。搾乳・乳加工の開始以後、約 9000 年²⁾の時をかけ、人類は乳加工技術と乳製品とを様々に蓄積してきた。現在では、主に自然環境に左右され、地域毎に適応した乳加工技術と乳製品がそれぞれに変遷・発達し、極めて多様な様態を呈している。この乳加工技術も、定住化に伴って急速に失われてしまう文化の一つである。乳文化を、乳加工技術を体系として理解し、乳製品の利用や乳に関わる諸事項などの諸相で、総合的に記録しておくことが是非とも望まれるところである。

乳加工という技術を記述することは、なかなか難しい。例えば、シリア北東部のアラブ系牧畜民バッガーラの乳加工の断片を記述すると；

ジブデ jibde とはバターのことである。シャチュワと呼ばれるヒツジの皮袋の中に、酸乳と水を入れ、最後に空気を吹き込んでから、注ぎ口を紐で縛る。シャチュワは、手足の四ヶ所を紐で固定的に縛られて袋状となっており、首の部分が自由に開閉できるようになっている。シャチュワは天井もしくは三脚にぶら下げられ、左右に振盪される。振盪を続けると、微小な脂肪球どうしが凝集し、米粒のような脂肪の小さい塊ができる……………

これは、酸乳を革袋を使って左右に攪拌してバターを加工しているシーンである。記述を読めば工程は理解できるが、難解でイメージも湧きにくい。記述による現象説明にはやはり限界性がある。この工程を表したのが次の2つの写真である。



ヒツジの革袋の感じ、天井からぶら下げ、左右に震盪する感じ、バターを生成する感じを見事に描き出している。映像記録の優れた特性がここにある。更に、映像が写真から動画になると、一層の情報を提供してくれることになる。もっとも、画像記録はその写実性ゆえに多くの情報を提供してくれるが、イメージを与えるに留まる。映像記録だけでは不十分で、記述と共に提供される必要がある。

このような映像記録と記述説明とをセットにした乳加工体系の事例を蓄積していくと、乳文化の一大データベースが構築されることになる。乳文化に関する諸相が、このデータベースを調べることで、その情報が入手できることになる。データベースの構築の意義は、先ほど指摘した通り、地域の人々と研究者への還元にある。このデータベースを広く提供する手法がアーカイブである。現在、「乳文化に関する希少情報 (<http://www.milkculture.com/index.php>)」として世界の乳文化についての事例をデータベース化している。

アーカイブ構築の作業を進めるにあたって、つくづく重要であると感じることは、1) ユーザーの立場にたって如何に分かり易くデータを蓄積できるか、2) 事例情報をスムーズに提供するためのスマートな階層構造と事例を横断して検索できる水平構造を如何に作出できるかである。この乳文化アーカイブでは、地図をプラットフォームにして、先ず知りたい地域にアクセスし、県・州レベルとなるとデータモードになるように設定している。乳文化の





諸相は、景観・牧畜、乳加工体系、乳食文化の3つのカテゴリーに分けて情報を蓄積している。それぞれの写真もしくは動画には、説明文、作者、撮影年などを付随させている。見たい写真をクリックすると、これらの情報が提供されるように設定している。映像が無秩序にダウンロード転用されてしまうことを避けるために、映像には透かし模様を入れている。現在は、テーマ検索するための水平構造の構築に着手している段階である。

アーカイブ構築における今後の課題は、それぞれの地域に人々に情報提供するために、その地域の言語に置き換える作業、事例を如何により多く蓄積するかである。これらの作業には多大な時間が必要とされるが、失われてしまう人類の文化遺産を生きた記録として留めておく意義を胸に感じつつ、これから楽しみながらライフワークとして臨んでいきたいと思っている。

注) 西アジアにおける土器付着有機物の脂肪酸・安定同位体分析により、BC7千年紀には乳

利用が開始されたと、イギリスの Evershed のグループが Nature 誌に 2008 年に報告している。現在のところ、この学説が乳利用の開始の最も古いとする時期推定である。

(ひらた・まさひろ／帯広畜産大学)

パラグアイと日本の喫茶の比較

大西 秀子・石井 智美

パラグアイは南米の中央部に位置する畜産と農業の国である。15世紀に先住民グアラニー族が暮らしてきた土地にスペイン人が来た。20世紀以降、世界各地から移住を受け入れてきた。日本人の移住は第二次世界戦後に始まり、パラグアイ国内に日本人が集住する「移住地」が形成されてきた。ブラジルへの移住が小単位で離れて住んだという移住の形態とは異なっている。このように固まって住むことが、日本の生活習慣を強く今日に伝える役割を果たしたと思われる。今回、パラグアイの日系3世として、日本で栄養学、食文化について学ぶ機会を得、本学会で日本、パラグアイ両国の喫茶比較について報告した。

報告者はパラグアイと日本という複数の「文化」的出自を持っている。今日、世界各地に様々な喫茶の習慣がある。ここで喫茶とはコーヒー、紅茶、日本茶など種類を問わず、飲みも

のを広く指すこととする。これまで人は、一杯のお茶を飲むことでくつろぐ心理的な効果を大切にしてきたといわれている。

パラグアイで最も飲まれているのはマテ茶（学名 *Ilex paraguayensis*）である。日系人の間では日本から輸入した緑茶も飲まれているが、マテ茶を愛飲している。マテの葉や小枝を乾燥させたものに、水または湯を注いで飲むのである。暑いパラグアイでは「マテ茶を飲まずに1日は始まらない」のだ。パラグアイでは1日に大人一人当たり2L程度は飲む。日本に来て、マテ茶の名前を知っている人がほとんど居ないことは驚きだった。

日本で大学生が何かを飲むといえばコーヒーを飲む頻度が高い印象である。さらに飲み物は自動販売機から購入することが多く、ダイエットを考え緑茶などの茶を購入していることは、パラグアイでは全く知られていない。自動販売機が多いことと、熱いお茶、冷たいお茶に分かれ、容器も工夫して売られていることに驚いた。聞き取りでは日本でも以前はお茶とは自分の家で作って持って歩き、来客があれば必ず出していたという。お茶をそのまま飲む状態で買うための製品なども無かったとのことであった。日本は生活の変化の度合いが激しいと感じたが、それが喫茶にも反映されているのではないかと思われた。

マテ茶を飲むときは、牛角製や木製の専用容器を使う。容器にマテの葉を8割方入れ、ポンビーリャというストローの先に茶漉しのついた専用の吸い出しを使って湯や水を加えては何度も飲む。途中で茶葉を変えることはない。

食器に対し個人の所有物とする意識が少ないパラグアイでも、マテ茶を飲む容器には、自分用のものがある。しかし後述するがマテ茶の飲用のときの容器は1つで、回し飲みするのである。専用容器で熱いマテ茶も冷たいマテ茶であるテレレも飲む。

マテ茶はパラグアイでは「飲むサラダ」ともいわれ、ビタミン補給源と考えられていた。今回マテ茶の微量成分を検討したが、茶葉のビタミンC量は日本の緑茶に含まれている量よりも少なかった。内陸アジアの遊牧民においても、飲用している乳茶がビタミン供給源だったのではないかと考えられていた時期があったという。茶葉自体にビタミンCがあっても、そのまま茶葉を食べるのではなく、湯で抽出することを考えると、栄養学的な見地から期待は出来ないと思われる。そして暖かい茶を飲むことでほっとするほかに、生水の状態では飲めない水を加熱によって安全に飲用出来ることになるという衛生面での効果も大きいと思われる。飲用する茶葉の種類と水の性質も密接な関わりがあると言えよう。水が豊かな日本に、茶が中国から伝来した時は薬としてもたらされたことを知った。

日本で茶を飲むときは人数分の容器が用意されるが、マテ茶は何人であっても容器は1つで回しのみする。日本の茶道の中に、飲み方として回しのみがあることを知ったが日本では回し飲みは日常的では無い。

パラグアイの日系社会では日本の茶道を、小学校の日本の生活を紹介する授業で習う。日本では皆茶道の心得があると思っていたが、来てそうではないことを知った。京都で抹茶をたてる機会を得たが、茶を飲むことに決まりごとが多く、家元制度があることに驚いた。日本以外には無い素晴らしい文化だと思う。抹茶を飲むときに季節感を先取りした和菓子がつくことを知った。

世界的に見てアルコール分を含む飲酒と異なり、喫茶をタブーとしている文化は少ないようである。喫茶はこのように時間、地域、民族を越えてそれぞれの形態で受け継がれてきた文化の形だと思う。

(おおにし・ひでこ／酪農学園大学 JICA研修員、いしい・さとみ／酪農学園大学)

パラグアイと日本の食と健康観

— 栄養学的見地から —

篠藤シルビア真弓・石井智美

食は人が生きていく上で 1 日も欠かせないものであり、個人の属性に関わるところが大きいと言われている。その内容には日々における差とともに個人差がある。しかし、食について、国として大まかな傾向は語る事が出来ると考えた。

パラグアイで第二次世界大戦後パラグアイに移住した両親から生まれた日系二世の私にとって、祖国日本の食に対する最初の印象は、野菜など食材が季節を越えて豊富にあること、世界中の料理が家庭レベルでつくられていることへの驚きだった。そして常にテレビ、雑誌などで食べものが話題として取り上げられることもパラグアイでは無く、パラグアイで周囲の大人の人々から聞いていた日本の食生活とはかなり異なっていることだった。

パラグアイでは私は、平均的な日本人家庭と同様に核家族で生活していたが、毎日の食事にご飯・味噌汁・漬物があった。こうしたパラグアイの日系人の現在の食事について日本で説明したところ、1980 年代の日本の食事で「伝統的な日本の食生活」の内容に近いのではないかとこの事であった。パラグアイでは今日の日本のように、食材を世界各国から積極的に購入しようとする風潮は無い。味噌、醤油、豆腐をはじめ、平均的な日本食をつくるのに必要な食材は、移住地ですべてつくられている。質素でも、長い間日本で培われてきた食事形態である「和食」は、パラグアイの日系人社会のほうが高齢者を中心に今日も残っていると見える。

パラグアイの日系人の間で続けられてきた食事のあり方が、日本では戦後の短時間のうちに大きく変わったことに驚いた。それは食事の内容が外国化したというより、日本というフィルターを介し、新たな形の日本の食事メニューに加えられたものが多いと考える事が出来るのではないかと思われた。

今日の日本では、食事をつくる材料が多様で、スーパーなどの店頭にある野菜の種類もパラグアイに比べて多く、その品質も細部にまで神経が届いていた。そんな日本において、野菜の摂取量はまだ栄養評価をする上では不足とのことであった。肉が食の中心であるパラグアイでは、限られた種類の野菜しか食べる習慣が無かったのである。今日の野菜利用には、移民した日本人が持ち込み普及させたものが多いのである。野菜、果物の栽培、利用によりパラグアイの栄養摂取に日本人は貢献してきたのである。

パラグアイでは健康の定義として日本と同様 WHO の定義を用いている。しかし両国で健康に関する意識は違いがある。

日本では健康に対する関心が高く、食事の内容、取り方にも関心が高い。そして、市町村にある保健センターなど、公衆栄養の指導があるシステムが上手く機能している。パラグアイでは健康に関する関心は高いとはいえず、食事の摂り方は肉が中心で、満腹になるまで食べることが多い。味付けは塩辛く、デザートは甘味が強い。日系人でも日本食を食べない人は肥満している。そのためラテンアメリカの中で、肥満大国と言われている。糖尿病、アテローム性動脈硬化症といった疾患をもつ人も増え、子供における肥満、糖尿の増加が大きな問題になっている。これらは食が関与している疾患である。

肥満について、両国において認識は異なっていた。パラグアイで普通と思っていた体型は日本では太り気味、ふくよかな体型としたのは肥満であった。

パラグアイでは食事摂取量の指針としてアメリカ政府の「食品ピラミッド」を用いていたが2009年3月から食事バランスガイドを発表した。

日本ではサプリメントの宣伝が多く、健康な人においてその維持のためとして消費量が多い。親が積極的に子供にも飲ませていることに驚いた。サプリメントを摂る理由として、「普段の食生活の栄養バランスが悪くなっている」、「環境やストレスでビタミンやミネラルをたくさん消費するから」が多かった。食事から摂ろうと工夫しないのかと思った。パラグアイではサプリメントの消費は少なく、昔から病気の治療や予防のために様々な種類の薬草を用いてきた。日系人の間でも畑に植えるなどして活用は盛んである。日本では健康や食事の重要性について子供の頃から教育しているが、パラグアイでもこれから必要だと思った。

(しのとう・シルビア まゆみ/酪農学園大学 JICA研修員、いしい・さとみ/酪農学園大学)